日本産鳥類の分類・分布的研究*

1. オオアカハラについて

森 岡 弘 之

国立科学博物館動物研究部

Taxonomic and Distributional Notes on Japanese Birds

1. Notes on *Turdus chrysolaus orii*

Hiroyuki MORIOKA

Department of Zoology, National Science Museum,
Hyakunin-cho, Shinjuku-ku, Tokyo 160

は じ め に

日本産鳥類の分類・分布についての研究は、古くからたくさんの人によって進められ、現在ではほとんど完成の域に達しているといえることができる。しかし問題がなくなったわけではない。とくに亜種については検討を要するものが少なくない。

旧北区の鳥類の分類は細かな亜種を認めすぎていた。多くの亜種が測定値の平均値の違いや羽色のわずかの違いによって区別されていたために、標本を同定するにあたってはさらに中間型を認めたり、産地によって亜種を決めねばならぬことも多かった。したがって、VAURIE (1959-1965) が多数の亜種を統合し整理したことは、歓迎すべきことであったといえよう。

筆者は、日本鳥類目録改訂第5版（日本鳥学会，1974）のスズメ目の部の編纂に際して、VAURIE の結論をほとんど全部採用した。ただし、日本関係についてみれば、VAURIE の見解に疑問のある場合もあったが（cf. 森岡，1972），目録出版にいたるまでの種々の事情のために十分な検討を加えることができなかった。これらの問題を解決しておくことは、分類学的見地からはもちろんだが、渡りの調査などをはじめ、応用上もから必要である。幸いにその後の資料の増加が著しいので、研究の終わったものから発表していきたい。今回は、その第1報としてアカハラ *Turdus chrysolaus* を取り扱った。

調査結果と考察

従来の日本鳥類目録（1932-1958）は、アカハラを基亜種 *T. c. chrysolaus* TEMMINCK とオオアカハラ *T. c. orii* YAMASHINA との2亜種に分けていた。VAURIE (1955: 6) は両者の間に著しい違いがないとし、後者を前者のシノニムとした。日本鳥類目録改訂第5版（1974）は、前述の理由で VAURIE (1955, 1959) に従い、アカハラに亜種を認めていない。

*この研究の一部は文部省科学研究費一般 B 448150 による。

原記載 (山階, 1929b: 155) によれば, *orii* は基亜種 *chrysolaus* (以下単に *chrysolaus* という) に似るが, 大形で (翼長が 5 ♂ 126–130 mm, *chrysolaus* では 28 ♂ 118–126 mm), 嘴高も大きく (7–8 mm, *chrysolaus* では 5.5–7 mm), さらに背面と下面の色が濃色である. また山階 (1942: 234) によれば, *orii* は, (1) *chrysolaus* より大形で, とくに嘴が太くて長い, (2) 背面の色がやや暗色で, とくに夏羽の頭は喉および前頭とともに暗褐色で, 背の色と明らかに異なる, (3) 胸と脇の色が濃く, 栗色を帯びるものが多い, などの諸点で区別されるという.

アカハラは元来変異に富む種であるうえ, 山階鳥類研究所に山階博士自身が *orii* と *chrysolaus* の中間と同定された標本があるので, VAURIE の見解は正しいように考えられた. しかし, *chrysolaus* のなかになかなか大形の個体が発見されるのも事実で, アカハラの地理的変異の研究が必要であった.

測定結果を Fig. 1 および Fig. 2 に示す. 測定はすべて筆者自身で行い, 資料は喉の黒い成鳥だけに限った (♀, 幼鳥および典型的なマミチャジナイ型は除いたが, 成鳥に近い♂の第1年目冬羽の標本は含めた).

測定結果について検討すると, 北千島で繁殖するものは樺太・北海道・本州で繁殖するものより翼長および嘴高がやや大きい傾向は確かにあるが, それによって *orii* を *chrysolaus* から区別することは困難であると考えられる (北千島産は翼長 4 ♂ 126.5–131, 嘴峰長 3 ♂ 22.5–24, 嘴高 3 ♂ 6.5–6.6, 樺太・北海道・本州産は翼長 17 ♂ 120–128.5, 嘴峰長 16 ♂ 21–24.5, 嘴高 46 ♂ 5.7–6.4 mm, いずれも 5–7 月の標本のみ). 筆者が調査した北千島の 4 標本のうちで, パラムシル島産の 1 点¹とアライト島産の 1 点²は比較的大きいが, パラムシル島産の他の 1 点³とマツワ島産の 1 点⁴は *chrysolaus* の大きさの変異内にあるとみられる (Fig. 1). 嘴高は北千島の 3 標本がわずかに大きいといい得るが, 嘴峰長は北千島産とその他のものとの間に差がなかった (Fig. 2).

繁殖期外 (8–4 月) の標本では, Fig. 1 にみるように, 翼長 130 mm 以上, 尾長 95.5 mm 以上の本州産 3 標本⁵は *orii* と認められるが, そのほかは *chrysolaus* の大きさの変異内にある. また, 山階博士が *orii* と *chrysolaus* の中間と同定されたエトロフ島産の 2 標本⁷も *chrysolaus* の大きさの変異内にある. しかし, 翼長 130 mm 以下の標本のなかに稀に顔と喉が黒色といえるほど濃い色のものがあり, それらは次に述べるように *orii* と考えられる.

測定値では *orii* と *chrysolaus* を明確に区別できないのは明らかだが, 繁殖期の♂の *orii* は頭部, とくに頭上と喉が非常に黒い点で *chrysolaus* と違うようである. すなわち, 前述の北千島の 4 標本では, 頭上・顔・腮・喉が非常に濃い黒褐色で, 頭上の色は後頸以下のオリーブ褐色とはっきり異なる. 樺太・北海道・本州で繁殖期 (5–7 月) に採集された♂成鳥の標本は, みな頭上から背にかけてほぼ一様なオリーブ褐色で, 頭上が背の色より著しく暗色なものはなかった (頭上が背よりごくわずかに濃いものはあったが, 頭上と後頸

¹ 山階鳥研標本 3383 号, 翼長 130 mm, これは *orii* のタイプ標本. ² 同 12385 号, 翼長 131 mm. ³ 同 3404 号, 翼長 126.5 mm. ⁴ 同 7843 号, 翼長 126.5 mm. ⁵ 科博標本 10345 号, 神奈川県三浦郡金田村, 1920 年 2 月 13 日; 同 10346 号, 東京都港区材木町, 1920 年 4 月 30 日 (以上清棲幸保氏採集品); 坂根千氏標本 60024 号, 宮城県, 1960 年 1 月 28 日. ⁶ 山階鳥研標本 13682–3 号, エトロフ島トモンリ, 1933 年 10 月 10 日. これらは♂の第 1 年目冬羽であり, 亜種まで同定できない.

Fig. 1. Wing and tail lengths in *Turdus chrysolaus*. $\triangle$ =breeding (May-July) specimens, *T. c. orii*; $\blacktriangle$ =winter (August to April) specimens, *T. c. orii*; $\circ$ =breeding specimens, *T. c. chrysolaus*; $\bullet$ =winter specimens, *T. c. chrysolaus*; $\blacksquare$ =winter specimens identified as intermediates by Dr. Yamashina; K=Kurile Islands; S=Sakhalin; H=Hokkaido; J=Honshu; R=Ryukyu Islands; T=Taiwan. All adult males.

Fig. 2. Bill height and bill length in *Turdus chrysolaus*. See Fig. 1 for explanations for symbols.

Fig. 3. *Turdus chrysolaus orii* (above) and *T. c. chrysolaus* (below), showing the dark coloration of the head in the former.

以下とが多少とも一線を画して色が異なり、いわゆる ‘black-capped’ の状態を示すものはなかった) (Fig. 3). また喉の色も *orii* ほど黒くないのが普通である。ただし、*orii* の頭部の黒褐色は羽毛の磨耗によって著しくなるようで、かなりの個体差があり、タイプ標本および 7843 号ではとくに色が濃い、他の 2 標本では比較的目的だたなかった。

幼鳥と♀は頭上の色と背の色とが同じで、*chrysolaus* の幼鳥や♀と区別しにくい。冬羽の♂成鳥も *chrysolaus* の冬羽に似ているが、注意して見ると頭上の各羽の中央が羽縁より暗色で、このため頭上の色がやや暗い感じがする。したがって、秋期の標本の場合は、ある程度まで測定値を参考にして亜種を決めるよりほかないが、2-3 月頃になれば羽縁の磨耗が進み、♂では *orii* の特徴である頭上・顔・喉の色の黒いことが分かる。

胸および脇の色は個体差が大きく、*orii* と *chrysolaus* の間に有意義な差を認めなかった。

結 論

オオアカハラ *T. c. chrysolaus* YAMASHINA は独立亜種として認めることができると思う。アカハラでは、北千島のもの (*orii*) が樺太・北海道・本州のもの (*chrysolaus*) より翼長および嘴高が大きい傾向はあるが、両者の変異はお互いにかなり重複している。しかし、繁殖期の♂では *orii* は頭部が黒褐色で、とくに頭上の色が後頸以下の背の色と違う点で、頭上から背以下がほぼ一様なオリーブ褐色の *chrysolaus* から区別できる。冬羽、幼鳥

および♀の場合は、羽色による違いが少ないので、測定値も参考にして亜種を決めねばならない。

付 記

測定方法は、翼長は物差しに押しつけて測った。嘴峰長は頭骨から測った全嘴峰長、嘴高は鼻孔後端での嘴高である。測定値は、測定方法が違えばもちろん違うが、測定法が同じでも器具や測定者の癖によってかなり違う。したがって、同じ標本について、筆者と山階博士の測定は必ずしも一致していないが（とくに嘴高は山階博士の値の方が常にずっと大きかった）、測定が同一人によって行われる限り、測定上の誤差が結論に影響を及ぼすことはないと考えられる。しかし、他人の測定値によって同定すれば、誤りを招くかもしれない。

筆者が調査した繁殖期の *orii* の標本は、パラムシル島、アライト島、マツワ島で採集された4♂、2♀、1幼鳥だけである（以上山階鳥類研究所標本）。山階（1929b）は農林省鳥獣調査室所蔵の千島列島産標本についても述べているが、これらは現在ない。南千島の繁殖期の標本は実見できなかった。

Orii の冬期の分布については、今までの記録が必ずしも正しい同定によっているとは限らない。筆者の調べた範囲では、青森県・栃木県・東京都・神奈川県・静岡県で採集されている。本州では比較的数の少ない冬鳥であろう。

今回の調査で使用した標本は、国立科学博物館、山階鳥類研究所、林業試験場および坂根千氏所蔵のものである。記して感謝の意を表する。

SUMMARY

Check-list of Japanese Birds (1974) follows VAURIE (1955, 1959) in synonymizing *Turdus chrysolaus orii* YAMASHINA with nominate *chrysolaus*. Re-examination of materials, including the type and other specimens from the Kurile Islands, has shown that the breeding males of *orii*, the northern Kurile population (Paramushir, Araidō, Matsuwa), can be separated readily from those of nominate *chrysolaus* from Sakhalin, Hokkaido and Honshu, on account of the very dark coloration of their head. In this subspecies (breeding males) the head and crown is blackish sooty brown in contrast to the olive-brown nape and back, giving an appearance of being black-capped, whereas in nominate *chrysolaus* the upper parts are more or less uniform olive brown. The wing length and the bill height (but not bill length) of *orii* are also larger, although the ranges of variation overlap to some extent between the two forms (Figs. 1-2). It therefore seems to me best to retain *orii* as a distinct subspecies. In females, juveniles and first winter males *orii* is rather similar to the nominate form, but in males the characteristics of *orii* may become recognizable in February or March as the wear of the plumage progresses.

引 用 文 献

- 森岡弘之, 1972. 伊豆・小笠原諸島のウグイスの分類学的考察. 国立科博専報, (10): 171-177.
日本鳥学会, 1932, 1942, 1958. 日本鳥類目録. 改訂第2版: 同第3版; 同第4版. 東京, 日本鳥学会.
—— 1974. 日本鳥類目録. 改訂第5版. 東京, 学習研究社.
VAURIE, C., 1955. Systematic Notes on Palearctic birds. No. 15. *Amer. Mus. Novitates*, (1733): 1-18.
—— 1959, 1965. *The Birds of the Palearctic Fauna*. 2 vols. London, H. F. Witherby.
山階芳麿, 1929a. 北千島 Paramushir 島産鳥類の採集物について. 鳥, 6: 63-99.
—— 1929b. 再び千島列島産鳥類について. 鳥, 6: 145-160.
—— 1942. 日本の鳥類とその生態, 2, 東京, 岩波書店.

(1979 年 11 月 10 日受領)